

短編・エッセイ部門

日常ついで。

入 間 しゆか

天気予報が付いていた。本棚の本やテーブルの上にあった調味料、テレビ台にしまつてあつたビデオテープ。それらが散乱するリビングで、ごろんと横倒しになつたテレビが映していた天気予報。記憶と呼ぶにはあまりにも曖昧なもの。

1995年1月17日。私は3歳だつた。震災を記憶している最後の世代。だが、記憶なのか両親から聞かされた話を記憶として残しているのかハッキリしなかつた。天気予報を映していたテレビだつて、その時の様子を親が写真に納めていたから、それを実際に見たかのように記憶しているだけかもしれない。

ただ、暗がりをお気に入り入りのちゃんちゃんこの紐を口にくわえて、母の手を引かれていたことは、私

の記憶と呼んでもいいと確信している。母の手は冷たかつた。何が起きたかもわからず、眠気眼で避難所の中学校まで歩いていた。その時、兄と姉と父がどんな様子だつたのかは憶えていない。

家が崩れた。倒れた筆筒の下敷きになりかけた。丁度、旅行に出かけていて、震災を体験しなかつたけれど、親戚を亡くした。そんなふうになんか震災を振り返るようになったのは、小学校高学年になつてからだつた。ようやく、あの日のことを言語化できるようになったのだ。私は家族も親戚も友達も失わなかつた。運が良かったのだと思う。両親は苦労したのかもしれないが、幼い私にはわからなかつた。

「なんで運が良かったんかな？」

向かいの席に座る聖華ちゃんが声を潜めて言った。私たちは図書室で阪神・淡路大震災についての資料学習をしていた。震災から10年。中学2年生。自分たちの経験を踏まえて震災を調べて、発表することになっていた。聖華ちゃんも私と同じで大きな被害を受けず済んだ家庭だった。

「奇跡、かな。」と私は言ってみる。

「奇跡ってなんか嘘っぽくない？」

「せやな。」確かにそうだ。奇跡という言葉は私たちには途方もない言葉に思えた。

「私らが生きることが奇跡なんよ。」

「そうなんかな。」聖華ちゃんは納得していないようだった。私は保健の授業で習った受精について思い浮かべていた。卵子にたどり着いた精子だけが得られる生命という権利。私がかこいる理由。

悲劇はいくらでも身近にあった。北村くんの祖母は家が倒壊して亡くなった。寺本さんのお姉さんは大怪我をして歩けなくなってしまった。

でも、私や聖華ちゃんには語るべき物語がなかった。運が良かった。ただそれだけだった。調べれば調べるほど悲劇や、それこそ本当に奇跡と呼べそう

な出来事はいくらでもあった。

来週、調べたことをクラスで発表する。私たちは夕方暮れていた。ただ調べただけの発表はしたくないという二人の共通認識があった。だから、できるだけ自分の言葉で自分自身の物語を語りたかった。運が良かったことは素晴らしいことだ。大切な人を亡くさなくて本当に良かった。でも、なんで私たちが運が良かったのか。それを言葉にしたかった。

「日常ってこと。」とふいに聖華ちゃんが言った。

「え？」

「うちらが日常生活をなんの疑問もなく生きてるってことちゃうかな？」

「なにが？」

「奇跡。」

「そうなんかな。」

「たぶん。」

私たちはそれから黙った。何かが形になりそうな気がした。母の冷たい手を思い出した。ちゃんちゃんこの紐をくわえていたことを思い出した。暗い部屋にテレビの天気予報だけが皓々と光っていた。そんな頼りない記憶の先に私はいた。

今も――。

2024年、33歳になった。結局、私と聖華ちゃん
は調べたことだけを發表した。あの日、私たちが
感じた奇跡を言葉には出来なかつた。高校生になつ
て私は地元を離れた。聖華ちゃんとは自然と距離が
できて、それつきりだつた。今彼女がどこで何をし
ているかわからない。いろいろあつた。いろいろあ
つたで片付けるのはあまりにも乱暴だが、いろいろ
あつた。地震は日本中で起きていた。新潟で、東北
で、熊本で、そして、能登半島で。母の手を握つた
3歳の私。記憶と呼ぶにはあまりにも頼りない記憶
を頼りに生きてきた30年という時間。私はこれから
も生きていくのだらう。それが日常つてこと。

さよなら、またね

石 角 直

朝食が終わったら、順次自室に戻って歯を洗って、身支度。リビングに集まることもなく集まり、テレビを観たり、新聞を読んだり、居眠りしたり、思い思いに過ごすのが日課。

今日は滋子さん、珍しくリビングへ顔を出すのが遅かった。しかも少しおめかし。

「あら、お出かけなの？」

仲良しの鈴江さんが声を掛けた。滋子さん、浮かない顔。

「もうすぐ娘を迎えに来るの？」

「いいわね、一緒に行くの？」

頷く。実は滋子さん、他所へ移ることが決まった。娘さんの住む近く、関東の施設へ。けれど認知症のある隣人たちには、事情を説明しづらそう。

午前のお茶の時間、ほっと一息ついたところへ娘さんがやってきた。滋子さんは介護士の助けを借りて、ソファから車椅子へ座り替え、促されるままに玄関口へ向かう。大げさな挨拶もなく、淡々と。一人でもなんとか歩ける鈴江さんと数人が見送りに出る。玄関のホールで、車椅子の推し手が娘さんへと引き継がれた。

「じゃ、行こうか。ありがとうございます」

娘さんがスタッツフらに頭を下げる。滋子さんも倣って、かすかに頭を動かした。

「さよなら、みなさん、お元気で」

「さよなら、またね」

すかさず返したのは鈴江さん、いつになく素早い反応だ。困ったような顔をして、首を傾げる滋子さ

ん。お構いなしに続けて、鈴江さんは言った。

「次はあの世でね」

それが聞こえた人があったのか、なかったのか。ただ滋子さんだけは、それまでの神妙な面持ちをくしゃっと崩し笑顔になって、心持ち顔を上げ、手を振って鈴江さんたちに合図した。

（おわり）

ビー玉、転がる

増田 優真

私は震災のときには生まれていない。あの地震があったのは三十年前、生まれたのは十六年前だ。十四年前の地震では数百キロ離れた神戸で、それでも怖がっていたらしい。そんな私でも、震災を肌で感じることもある。

幼稚園の頃、ビー玉を転がして遊んでいた。手で転がすのではない。引き戸の溝で転がしていた。ビー玉を置いただけで少しづつ速くなっていき、音が変わっていく。幼稚園児にとっては爽快だったのだろう。

中学生になり例の引き戸に、防音テープを貼ろうとした。私の家はテレビと勉強机が同じ部屋にある。だからよくリビングに「移住」して勉強していた。それでもテレビの音がうるさいから、防音テ

ープを貼ろうというわけだ。

「テープ」といつてもスポンジに両面テープを張り付けたようなものだ。「防音テープ」というよりは「防音スポンジ」と言ったほうが良い。引き戸が当たるところに貼るだけだ。そう思っていたが。

うまく貼れなかった。普通に貼ると、スポンジと引き戸の間に隙間ができてしまう。これでは「防音」の意味がない。幼稚園の頃にビー玉を転がしていたことを思い出した。

「これは地震のときにできたんだ」

やっと気づいた。「普通の家」ならビー玉を溝に置いて、勝手に転がっていくかない。地震で家が傾いてしまったから、ビー玉は転がっていくのだから。両親は傾いた家で遊ぶ子供を、どんな思いで見

ていたのだろうか。

似たような話は、他にもある。

私の高校は、ドアの建付けが悪い。両手でもなかなか動かないこともある。「あの先生は片手でドアを開けた」とちよつとした噂になるほどだ。

その高校に減災復興学の専門家が来たことがある。その方と先生は仲が良く、休憩時間でも話し込んでいた。笑い声も聞こえてくる。

「うちの高校は建付けが悪いんですよ。あれは地震のせいだと思んですけどね。生徒は何も考えてませんけど」

雑談の流れで何でもないように言うが、私にはやけに重大なことのよう聞こえた。何事にも「理由」はある。ここにも震災は隠れていたようだ。

三十年前の「あの日」、神戸が震災に見舞われ、めちやくちやになったことは、簡単には想像できない。「そんな風になるわけがない」と誰しも思ってしまう。でも、空襲の不発弾が今になっても見つかるように、震災の「跡」は確実に残り続けている。「跡」を見出していき、震災当時のことを想像することが、私たちには求められているのだろう。

佳作

「Soft Wind」

「ホンマこの坂きついなあ。やっと学校着いたあ。でも、まだ階段いっぱいある」

僕の住んでいる街は、海と山がすごく近い。東西に細長く、南は海側、北は山側と呼ばれている。

海側の僕の家から駅を過ぎて、山側の高台にある中学校までは坂道を三十分登る。校門からも階段が三か所。四階の三年生の教室まで上がるとクタクタになる。

「やっと教室や」毎日言ってる。

教室はコロナ以降、朝は窓が全開。机の上に置いてあっただろうプリントが、強い風で飛んで落ちていた。

「おはよう。一番乗り。ここ気持ちいいね」
バサバサ音を立てるカーテンの横から誰かが出て

きた。

誰やねん。ひとりでゆっくりしようと思って、早く登校したのに。

紺ブレを着た人が僕のほうに向かって来た。

「イタツ」

机に脚をぶつけている。なんかおつちよこちよいな感じ。

(背え高)

170センチある僕が見上げた。

「おはようございます」

とりあえず挨拶した。

「今日から、このクラスの担任になった風真(かざま)です。国語が担当だよ。これからよろしく」
クールな見た目ののに、声はふんわり柔らかい。

たけだ みさ

陽射しで、先生の顔がキラって光った。

ホームルーム。風真先生が一人ひとりの顔をじっくり見ている。

「受験のことも、愚痴でも、何でも聞くよ」
話し方ピリピリしてない、やっぱりふんわりした声。

「今日から卒業までを面白い一年にしよう」
連絡事項が終わって先生が最後に言った。他の先生は、気合入れて勉強頑張れって言うのに。母さんもや。でも、みんな必死で受験勉強してる。面白くなんかできないって思う。

初めての風間先生の授業が始まった。
先生が教科書を読む声はスッと頭に入ってくる。時々話しは脱線するし、雑学も話す。でも、不思議と塾のテストや模試の範囲にはまっていたりする。風間先生の国語の授業は逃さず聞いていたい。好きな教科なんてなかったけど、国語だけは楽しみになった。

前期の模試の結果が出た。国語の点数はかなり良

かった。母さんには国語だけ見せたかった。でも、模試の結果は全教科の点数が一覧表やグラフになっている。だからやっぱり怒られた。一教科だけ嬉しくて、母さんのガミガミは何も覚えていない。

一年生の時は、三学期からコロナで学校での授業がなくなつて、オンラインの自宅学習だけになった。母さんは仕事で僕一人だったから、動画ばかり見る癖がついた。勉強せなつて思えば思うほど勉強が手につかなくなつて、集中力も続かない。成績はどんどん下がるし、勉強の仕方すらわからなくなつたまま、二年生になった。

成績は全然上がらない。僕の通知表を見るたびに母さんは鬼顔になる。勝手に塾に申し込まれて行かされたけど、塾の先生にも塾の勉強にも着いていけなかった。

「ちゃんと勉強してるん」とか、「ちゃんと理解できてるん」とか、母さんは聞く。

(こつちが聞きたいねん)

母さんが怒るので、塾へは仕方なく通つた。

うわの空なもの、集中できないのもわかつてる。

でも、どうやったらいいのかわからなくて、気付い

たら三年生になっていた。

「あつ、イタタツ」

風真先生が教卓でまた脚を打った。

先生の国語の授業は、漢字の起源や意味を興味深く話してくれる。絵みたいな崩れた文字が今の漢字になるまでを黒板に書いてくれるのがとても面白い。僕は漢字のことをもっと知りたくなってきた。

「久しぶりの九十点。頑張ったやん」

中間テストで国語の点数だけは母さんに褒められた。でも、他の教科はやっぱり怒られた。相変わらず集中できないし、授業も面白くない。このままでは駄目だと思って、放課後どうしたらいいか、先生に聞いてみた。

「先生も子供の頃は勉強嫌いだったよ」

「じゃあなんで先生になったん」

先生は、風でバサバサ音を立てるカーテンを掴んだ。

「小学校の修学旅行で漢字ミュージアムに行ったんだけど、そこではまっちゃったんだよ」

中国で生まれた漢字が、日本でどう進化したの

か、日本だけが数種類の文字を使い分けする。そんな日本語のこともっともっと学びたいって思ったんだよねって、先生は言った。

「漢字は音読みしたり、訓読みしたり、いろんな読み方があるよね。ひらがなも、カタカナも元は漢字なんだよ。漢字が熟語になってひらがなやカタカナが組み合わさって文章になる。字体もいろいろあつてすげえよね。僕は日本語の奥深さや歴史に興味を持ってもらいたくて国語の先生になったんだよ」

先生の声のトーンが撥ね上がった。

「僕も国語にはまりそうやけど、他の教科は全然だめ。家ではつい動画を見てしまうねん。どうやったら先生みたいに勉強できるかな」

先生の目をじっと見た。

「国語が好きになってくれて嬉しいな。勉強は文字の読み書きから始まるからね。国語が好きになったら、他の教科もきつと大丈夫だよ。苦手な教科は、とりあえず薄い問題集からやってみようか。ゲーム感覚ならできるよね」

国語だけじゃなく、先生が他の教科も見てくれるって言った。

先生は僕にわかるように教えてくれる。だから、

薄い問題集を一冊やり切れた。

一学期の通知表の国語は「5」になった。他の教科も少し上がった。僕は勉強が嫌じゃなくなってきた。

久しぶりに母さんが褒めてくれた。

「すごいやん」

もっとやってみようって思った。

三者懇談で僕が行きたかった公立高校は無理だとわかった。僕に向いている私立高校を先生が勧めてくれて、専願で受けることにした。専願の科目は三教科。だけどやっぱり少し頑張らなあかん。でも、気持ちちはちよつと楽になった。

夏休みの間も風真先生に勉強を見てもらっている。先生は嫌な顔しないで僕にわかりやすく説明してくれる。

僕は先生に聞いてみた。

「僕に教えるの面倒じゃないん」

「楽しいですよ。わからないって悩んでる子の顔が、理解した途端にパーッと晴れる。そんな瞬間が大好きなんです」

そう言っている先生の顔も光った。

先生と一緒にやったら、他の教科も頑張れる気がしてきた。

「僕、国語の先生になる」

先生に言ってしまった。

先生は立ち上がって窓際に行った。

舞い上がったカーテンの側で、やっぱり、ふわっと笑った。

八十五歳の御褒美

清水久子

八月二十七日家の廊下で転倒救急車ですずらん病院へ入院 九月二日足のつけ根の骨折手術 リハビリ出来なく十月二日しあわせ村のリハビリ病院へ移る 本格的リハビリの開始午前午後一日に一時間四十分余り 月金は風呂 有馬温泉と同じ銀泉 最初はリフトでつかる 化粧水なくても すべすべの肌 上げ善据え膳主婦にとつては極楽生活 家は地獄 主人は九十歳認知症 息子と二人 デーサービスへ夫婦で月水金と午後だけ行つたので何とか行つてもらえる様に 朝昼夕電話しながらデーサービスへも電話でお願い 子供三人土日は次女が来て木曜日は長女 息子はその間娘の助けを借りながら世話してくれる 一ヶ月後長女が風呂で足の甲を骨折手術して又相当かゝりそう松葉杖で歩く 右足だけ

ら運転出来ず主人が会社が引けて 加古川から送迎して一泊することもあり…… 十一月半ばになつても帰れなく そんな時に義弟の訃報 息子と次女が代理で参加 家族犠牲にして申訳ないといひ口にする と 看護師さんが八十五年間一生懸命生きてくれたのですから御褒美ですよ そう思つてゆつくりしていつて下さい その言葉にハッと温かさを感じ人生を振り返ることが出来た 従妹に電話すると三人の子育てして義母の世話して往生させた この際子供に恩返しさせて何も気にせずゆつくりしたらいい！ 弾き返す様に笑わせてくれた 七十人の理学療法士さんと会話しながらリハビリ 自立の退院歩いて帰る 認知症二つ折れで歩く二人の散歩 人生はこんなものかとあきらめていたがまだく二人幸

を味わって主人を見送る使命がある 人生の大きな
節目を感じ充実した終活のため勇気づけられた病院
の皆様感謝し 余生の夜明けに夢ふくらませて
無知な自主トレでリハビリ遅れ先生に迷惑かけたこ
ともあったが成長の課程として思う一齣として笑え
ます様に 入院生活四ヶ月